

Katu 族の棺

嶋根 克己

2016年9月14日午後にはラオス人民共和国セコン (Secon) 県タテン (Thateng) 郡カンドーン村を訪問した。本稿はラオス・ベトナム国境の山岳地帯に居住する Katu 族 (ベトナム語ではコトゥ族=Người Cơ Tu) の棺をもとに山岳少数民族の生活の変化を考えてみたい。

Katu 族とはラオス・ベトナム国境地帯に住む少数民族山岳民族である。両国における近年の国勢調査ではラオスに 28378 人 (2015 年、ラオス全人口の 0.44%)、ベトナムに 61588 人 (2009 年、ベトナム全人口の 0.07%)、両国併せて 9 万人程度を数えるに過ぎない少数民族である。

小論では、われわれが知るところの少ない Katu 族についての一般的情報と神話的世界について言語学者が著した論文から紹介する。続いてカンドーン村での見聞を、フィールドノートをもとに記述する。そしてラオスとベトナムの Katu 族の墓制を比較するために、ハノイにあるベトナム民族学博物館の展示を紹介することにした。

1. Katu 族の社会

オーストラリアの言語学者である Nancy Costello (2003) によれば、Katu 族は言語的にはモン・クメール語族の支流である Katuic 語族に属している。ラオスではセコン川流域のカラム地方の山岳地帯に主に居住している。ベトナムではカンナム省とチュアチエン省に多くが住んでいる。

Katu 族は興味深い慣習、伝統、知識、および民俗を豊富に有するとともに、占星術や民俗医療などの科学にもたけている。Katu 族の社会構造は彼らの環境と整合的である。Katu 族は彼らを取り巻く世界と調和しながら生きている。その世界には、ほかの人々、動物、鳥、木々、石、水、伝統と多くの精霊などが含まれている。などと紹介されている。

Katu の創世神話として、かつて世界は天、地、地下の三相に分かれていて調和的であった。天から地上に諸霊が下ってくることで、世界が構築されてきた。そこには dyaang を頂点として saq、brau などと名付けられた霊が人々の生活と大きくかかわっていたのである。

Katu 族の村の中心には石でできた柱があり、それは天に向かってそびえたつ大きな石柱である。村が作られたときに、人々は鶏と豚を殺して、柱の上に置く。肉は石柱の saq に捧げられ、dyaang の霊はそれを喜び、人々に村を拓くことを許すのである。

各村のはずれには守護霊である dyaang が棲みついている社 (shrine) がある。そこには彼

らの血を振りかけられた竹の葉の房飾りがつけられている。精霊たちは刀と槍と盾を持っている。

言語学的な観点からすれば、**Katu** 族の言葉は危機に瀕している。今後ラオスとベトナムの言語学者が協力して更なる比較調査を行わなければならないが、**Costello** は、ベトナムとラオスの **Katu** の言語がかなり異なってきたのではないかと考えている。それは両者が国境によって隔てられており、相互交流ができないからであり、将来的には異なった言語として分類されることになるかもしれないと懸念している。

Costello の **Katu Society: A Harmonious Way of Life** から **Katu** 族の言語と神話的世界を簡単に紹介した。短い滞在では知ることのできない創世神話などが示されていて興味深いが、残念ながら筆者が関心をもつ葬礼・墓制についての記述を探し出すことはできなかった。次節ではカンドン村での知見をもとに同村での葬礼・墓制について聞き取れた内容を記しておく。

2. カンドン村訪問

以下の記述は、同村の村長の案内を、ラオス人ガイドならびに米坂浩昭氏が通訳によって理解しえた内容を、同行した同僚と簡単なクロスチェックした後フィールドノートに書き記した。後日写真資料とともにデータ化した。

カンドン村は人口 1228 人、155 世帯、面積は 122ha で住民の 95% が **Katu** 族だそうである。ラオス国内の **Katu** 族の人口を 28382 人とする先の国勢調査の数字に従うとすると、ラオスの全 **Katu** 族の 4% ほどがこの村に暮らしていることになる。

この村は 1996 年ころにベトナム国境付近の山岳地帯から、焼き畑農業を捨てて低地に移住してきた。かつては年に 4 回の祭りがあったが現在では二回に減ってしまったということである。現在の主な祭りは、村人全員で行う 5 月の水牛祭りと、家単位で行われる 11 月に収穫祭である。**Costello** は **Katu** 族が自然環境と調和して暮らしていることを強調していたが、高地の生活を捨てて、低地で農業に従事したり労働者として雇用されたりすることは、彼らの伝統的な生活を大きく変えたと思われる。伝統的な祭りの回数が減少したことはそのひとつの表れであろう。

スピリチュアル・ハウス（集会所）の入り口となる軒先は、それぞれ人間とサルが彫られた柱で支えられている。ハウスの中心には男の座像がある。その頭から脳が渦を巻きながら上に伸びており、スピリチュアル・ハウスの屋根を支えている。村の神話的な世界観を表しているようである。屋根を支える梁には木製の人形 7 体が飾られている。男の祖先である犬、女の祖

先であるフクロウのほか、民族衣装の女や太鼓や楽器のようなものを持った木像もある。いずれも素朴な木彫りである。ここには3日におきくらいに村人が集まり、政治を含む村にかんするすべての事柄について話をするのだそうである。

スピリチュアル・ハウスの前には竹の幹がまるでゲートのように一対、たかだかと天に向かって伸びている。一本は松明を灯すことができそうな漏斗状の先端をもつもの、一本はロープが先端からつるされ、それらにはところどころ竹の枝で飾り物が施されている。竹を支えている柱には祭りのときに供犠となる水牛が繋がれるそうである。

この部分に注目すると、この建物は Costello が記述した守護霊である *dyaang* が棲みついている社 (shrine) のことであるということが推測できる。インフォーマントの話の中から神話との関連をきちんと聞き取ることができなかったのが、今となっては悔やまれる。

写真1. スピリチュアル・ハウスの入り口（竹の葉の房飾りがつけられている）



2016年9月筆者撮影

葬儀で使用する棺を見せてもらえるということなので、村の奥深くまで分け入ることになった。スピリチュアル・ハウスから数百メートル離れると住居群から離れて穀物倉庫群がある。穀物倉庫はほかの住居と同じように高床式であり、一戸はおよそ二〜三畳ほどであろうか。その穀物倉庫の軒下に、いくつもの棺が無造作に雨ざらしになっている。

棺は、本人が生きているうちに子供や孫が贈るものなのだそうである。木をくりぬいた本体

と蓋が合わさってのっぺりとしたカプセルのような円筒形を構成しているのが棺である。かつて棺はチーク材を用いて手作りだったが、現在シンプルな棺は買うことができるようになった。このような少数民族においても葬儀が村内の自給自足的な関係から離れて、商業化のプロセスに巻き込まれていることが理解できる。

それらの中に一棺だけ群を抜いて精巧な作りのものがあった。写真に見えるようにカプセル状の蓋を飾るように見事な龍の彫刻が施されている。こうした装飾は、特に地位のある人にだけ許されているのだそうである。

写真 2. 龍の彫刻が施された棺



2016年9月筆者撮影

村で死者が出ると、村人全員が助け合いながらお葬式を行う。墓場は道路を挟んで村の外の山の上にある。柩を頂上付近まで運び上げ、地面の上に置き、その上に屋根を葺く。土中に埋めることはしない。

他所には寺院と原始信仰（アニミズム）が共存している村もあるが、この村に寺院はなく、宗教的儀礼はスピリチュアル・ハウスで行われる。この村では祖先崇拜が重要であり、祭りの

前になると祖先がスピリチュアル・ハウスに集まってくると考えられている。

3. Co Tu 族の墓

筆者はベトナムの葬送儀礼を研究するためにハノイ市にあるベトナム民族学博物館をたびたび訪れている。ベトナム社会には全人口の 85%を占めるキン族のほかに、53 の少数民族がいる。ラオスで *Katu* と言われていた人びとは、ベトナムでは *Người Cơ Tu* と呼ばれている。本節では *Co Tu* と表記して話を進めたい。先に述べたようにベトナムには中部を中心に 61588 人の *Co Tu* 民族が住んでいるが、ベトナムの全人口からすれば 0.07%に過ぎない。

民族学博物館には、ベトナム各地に居住する多様な少数民族の様々な風俗についての資料が建物の内外に展示されている。次に示す写真は筆者が 2007 年に同館を訪れた際に撮影したものである。

写真 3. Co Tu 族の棺と霊屋



2007 年 11 月筆者撮影

写真には、龍の彫り物をした棺が手で担ぐ輿のようなものに載せられて地面に置かれている様子がみえる。棺はカンドーン村で見たものと形状がよく似ている。棺は 6 本の柱に支えられた立派な屋根に覆われ、その屋根はまた水牛の彫り物などで飾られている。この展示物の説明

は大略次の通りである。

この墓はカンナム省ドンジアン県に住むある男性が義理の父のために 1996 年に作成したものにもとづいており、2005 年に完成された（1996 年に義理の息子から寄贈され、2005 年にこの形で埋葬された、という意味だと思われる）。この種の墓は Co Tu 社会でも裕福で上層の人の二次埋葬のためのものである。こうした状況において柩は掘り出され、精巧に彫刻された大木の幹に置かれる。死体は墓地に運ばれて安置され、供物とともに人目に付くように陳列される。

炭、イモ類、サトウキビなどで塗装された彫り物は、葬儀の最中に生贄にされ、豊かさのシンボルでもある水牛を象っている。イグアナ、鳥、シダの葉、悲しげに座る人物像などは Co Tu 族の墓に共通する装飾である。

以上の説明文はいくつかの点において、ラオスのカンドーン村での聞き取りの内容と一致する。棺が生前から男系の子孫によって準備されること。使用者は高位の人物に限られること。精巧な彫刻が施されていること。柩は地中に埋められるのではなく、屋根に覆われて地上に展示されること、などである。

一方、カンドーン村での聞き取りとの相違点も見られる。カンドーン村では遺体は土葬されることなく屋根を葺いてそのまま山頂に放置されるということであったが、民俗博物館の説明では土葬後の二次埋葬用の棺だとされている。これは葬礼の方法として大きく異なっている。ベトナム社会の主要民族であるキン族は中国の影響を受けて二次埋葬（いったん土葬したのち数年後に掘り起こして遺骨を収集し、埋葬しなおす習慣）を行う文化を有している。そうした習慣が Co Tu 社会に取り入れられ、二次埋葬用の棺となったというのが、ひとつの説明であろう。

このように少数民族は他民族との接触や生活環境の変化による文化変容を免れることができない。Costello は言語の観点から両国に分かれた Kato 族と Co Tu 族の分離を懸念しているが、葬制墓制という視点からしても両者の文化変容は著しいものがあると考えられる。

参考文献・資料一覧

Ban chỉ đạo Tổng điều tra dân số và nhà ở trung ương, (2011) *Tổng điều tra dân số và nhà ở Việt Nam năm 2009* (『2009 年版 ベトナムの人口と住宅の国勢調査』)

Costello, Nancy (2003), *Katu Society: A Harmonious Way of Life*, in ed. Goudineau, Yves, *Laos and Ethnic Minority Cultures: Promoting Heritage*, UNESCO Publishing.

Lao Population and Housing Census, (2015) *Results of Population and Housing Census 2015*.

Vietnam Museum of Ethnology, (2006), *Vietnam: Journeys of Body, Mind and Spirit*.